

タ子

○一声も風もつつぬけ夏座敷

○親も児も風にねまりぬ夏座敷

庭の花床に一輪夏座敷

万貴

○川の字の手足にやさし夏座敷

○山女子の脚線すこやか夏薊

○夏帽子花の名ひとつに囚われて

志津子

○日に焼けた手から受け取る夏薊

○竹煮草なんだかんだと年は取る

山も田も駆けぬけて行く白雨かな

富子

○正座して「蜘蛛の糸」読む夏座敷

○外は雨思い出も入れ豆を煮る

薊歌三十七年前が鮮やかに

千代

○カルストの空あをあと夏薊

竹籠にハーブを生けて夏座敷

鯉跳ねて水面弾ける夏至の朝



ふみ子

夏薊天神様に続く道

この花好きよ鎌で刈りし日夏あざみ

 ちちはは
 義父義母を共に見取りし夏座敷

農子

○正しいは正しいと言う夏薊

隣家より枝切る音や梅雨晴間

三度目や寄る蚊仕留める掌に

初江

○迷い来し春野西分青田風

湖底には太古の樹海ポート漕ぐ

老猫のハンター化する夏座敷

富江

夏薊端山道を振り返り

妹よ忘れないでネ夏薊

夏座敷母の声して兄嫁が

ゆの

○風吹いて遺影カタリと夏座敷

○揚羽蝶エリック・カールを知らないか

夏薊一揆の裔か山風か

美貴

○昨夜の雨四葩の色となる朝

○木下闇以蔵の墓も其の中に

大の字に家族三人夏座敷

弘

○夏座敷考の残した焦がし跡

夏薊ひとりぼっちの掩体壕

人間の時間短し蟻の列

郁子

○はにかみし面大人びて更衣

夏座敷突然の客鬼やんま

付き合いは難しきもの夏薊

えり

夏座敷昭和の家も令和かな

 ほか
 夏薊他おしやるや薄き濃き

 ははきん
 横たわる 帚 見かね切れけり

味元 昭次 作品

握り締む沖縄の日の薊かな

老人に夢ありとせば夏薊

夏座敷戦死の叔父へ開け放つ

★次回市民句会

【開催日時】

令和三年七月二十八日(水)

午後一時一五分～午後四時(予定)

【場所】

オーテピア4階 研修室

どなたでも自由にご参加いただけます

